アクティブラーニングに向けて工夫した点（テーマ責任者）

＜自然・生命系＞

アクテイブラーニングに向けて学部で勉強会(FD)を行った。

薬学部は小さい学部であり、学部全体でできるだけ情報共有できるように、モジュールについての学部 FD を開催し、現状報告、事例報告、問題点の共有、LACS について、学生のメンタル面などを半日かけて議論した。

授業の活性化を促すとともに受講者の理解度を把握するために，クリッカを利用できる環境を整えた。数理的な概念はじっくりと時間をかけて考え，実際に自分で実例を計算してみることで理解が深まることも多いため，授業の中に個別演習を組み込むように調整した。自然科学系の科目では，映像・教材などで実例を提示する工夫を取り込むよう調整した。

1年生の後期および2年生の前期に，テーマ選択者全員に電子書籍Readerを貸与して，普通教室では授業資料の閲覧やアンケートへの回答等に，端末室ではセカンドモニタとして，また授業時間外においても自由に利用させた。

スクラッチカードを用いた試験など

受講生に対して、以前よりさらに理解出来ているかを問いかける工夫をした。

学生に発表してもらった。

各科目に実施を任せているので全体としては工夫していない。

各講義担当者に任せました。

＜人文・社会系＞

グループディスカッション、リアクションペーパー、プレゼンテーション、ピアレビュー等の導入について、数回意見調整を行い、それぞれの科目における状況についても情報交換を行った。

各教員の間で実践を紹介しあい、とくにモジュールⅡに重点をおいて、グループワークの課題を工夫しアクティブラーニングの充実を目指した。

モジュールⅠの3科目の担当者で、どの程度まで授業への学生参加を進めるかパターンを大雑把に決めて授業に対応した。

可能な授業でグループワーク・プレゼンテーション等の導入学生の意見表出の機会を増やすこと（12月に責任者を引き継いだため細かな点は把握していない）

グループワークが苦手でなかなか話し合いにならなかったので、ワークショップ形式に途中から変更した。何かワークをするということではできていたかと思う。

専門外の受講生に興味を喚起させること。

科目毎にアクティブラーニングの工夫をしていると思うが，講義に関して今年度は相互連絡を取っていない.

私が担当した科目は昨年の状況を踏まえ，クリッカーの効率的な使い方（出席，質問，理解度，演習）とグループ発表までのスケジュールを変更した.

アクティブラーニングの実践を個人での試行に委ねたため、モジュール全体としての工夫は行わなかった。

現時点での課題（テーマ責任者）

＜自然・生命系＞

多学部の教員からなるので，講義担当の調整が困難である．医歯薬および経済は各グループ内で調整しているが，情報がうまく伝わってこない．安全安心は3つのモジュールが同時に進行しているので，共通部分をうまく管理してもらいたい．

責任者の過大な責務

モジュールⅠ科目：再履修が困難であることモジュールⅡ科目：後期開講の科目を前期開講前に決めなくてはならず，前期科目の単位を修得できなかった場合でも追加で履修できないこと

学生にはモジュールの枠にとらわれない自由な科目の選択が許されることが望ましいと考える。

文系学部と理系学部が混在し，学習意欲あるいは予備知識に大きな差がある。また，同一学部の中でも，学習意欲あるいは予備知識に大きな差がある。より学習効果を高めるためには，受講者の編成方法を再考すべきである。積み上げ式の自然科学系の授業では，既習・未習の違いは決定的である。

受講生のモチベーションの低さ。担当教員の負担感が大きいこと。

欠席者や課題を提出しない学生への対応に苦慮する。第 3 志望だからと言ってその学生へ特別な配慮はできないので、学生が相談しやすい窓口を設けて何らかの対応をしてやれないか。 大学院生を持たない教官がSAを活用できるシステムを作ってほしい。一人で15 回分担する教官は、非常に負担が大きい。

受講者が少ないため、多くの学生に選んでもらえるようなモジュールテーマとしたい。

効果評価

4月始めの新入生への教員によるモジュール紹介は必要性が特にない。

＜人文・社会系＞

「体系的・定型的な知識伝授」を目的に加えることが望ましい。

同じ学生群を対象にしていることから、より担当教員間の連携を密にして、目標や評価の在り方を共有する必要がある。

現時点では、モジュール科目の取りまとめをする意味があまり見えない。モジュール内容ではなく、アクティブラーニングなど方法でのことについて、モジュール責任者が負担を負うことは、違うと思う。また、各モジュールの基本的な内容を担当者が担うもので、現在しているような具体的なところは、行わないことで始まったと思う。

授業内容：教員免許状・授業内容との兼ね合いで，どこまでアクティブ・ラーニングにしてよいのか，できるのか，迷っている。
事務：テーマ責任者経由で科目責任者等へ連絡・依頼をすることが多い。事務の方々には大変お世話になり，また，しかたないものもあるが，負担を感じたのはたしか。モジュールⅡの学生の割り振りをテーマ責任者が行うというシステムには少々びっくりした。

テーマ責任者は不要。部局単位の調整と教養教育事務室からの直接連絡により対応をお願いしたい。担当教員（科目責任者）が複数部局混合の場合、事務的な調整はテーマ責任者を通じず自学部の学務係や教養教育事務室経由で行われており、テーマ責任者

の必要性を感じない。
RECNA の場合、ほとんどの担当教員同士が頻繁に顔を合わせ、普段から様々な意見交換を行っているので、あまり不都合を感じることはなかった。来年度以降は、多文化社会学部の教員も参加するので、また少し調整を検討しなければならないと思われる。

担当が固定化するのか毎年変更するのか、モジュールに任せるのは大学として好ましいとは思えない

芸術系科目での受講者数制限

全体の受講者が少ないのでモジュールⅡでは受講者が少なく(特に 2 年次開講科目)アクティブラーニングにならないとの意見もあり、科目の選択肢があっても学生は早く受講したいのでモジュールの科目数を減らしてもよいと思う。他のモジュールを選択する機会もあってよい。

想定した以上に学生の遅刻が多い。また、遅刻の程度がひどく 90 分の授業で 60 分～80 分遅れて来る者が少なくなかった。そのため、その日のテーマをよく理解せず答える者も多かった。欠席も多い。多くの学生の発声がか細くて数メートル離れると発言が聞き取れない。学生同士でのディスカッションに支障をきたす大きな原因であった。

受講生(教養ゼミナール)で文教での様子をきくと、とても評判が悪いので、モジュール導入前に戻すべきと考えます。

モジュール導入前の状態に戻して欲しい。

(1)WG での作業の透明性の欠如(メンバーや議論の内容の非公開)
(2)理念と実態が乖離している。・負担論が先行…教員により内容に大きな差がある。・テーマ内での内容調整がしっかり行われているテーマが少ない(モジュールニュースの内容と肉声との大きな乖離)。・学部責任制では偏った方法論になりがちである。⇒学部横断的テーマ設定が難しく、学生からの選択の幅がないという批判にもつながる？
(3)テーマ・科目の選択について・テーマの数が少ない。・学生にとって科目選択の幅が小さい。・学部教員団が設定するテーマを、その学部の学生が受講できない。・モジュールⅡの履修科目数の制限。
(4)授業方法について・教員の意識の差(FD等への参加者数を見てください)。・コミュニケーションが苦手な学生への対応。・SAの採用が認められていない。
(5)教員が抱える問題点・テーマ責任者が事務連絡者になり、本来の目的を果たしていない。 ⇒テーマ責任者が必要ですか？・テーマ責任者の職務範囲が広すぎる(何のためのテーマ責任者かの意　識が欠けている)・複数教員でやる科目について、ファシリテーターが単なる担当者決め　だけに終わっており、ファシリテーターの役割を果たしていない。・ローテションで回していくところでは、振り返りができておらず、改善につながらない。
(6)成績評価について・当該科目で基準を満たさなくても、他の科目で満たしていれば何とか　ならないかという姿勢。・再履修者はテーマに関係なく科目選択ができるというモジュールを自己否定するようなやり方。

アクティブラーニングに向けて工夫した点（モジュールⅠ科目責任者）

＜自然・生命系＞

毎回、レスポンスペーパーを導入し、講義理解度に向上を図った。

毎回、授業の感想文と質問を書かせた。

１．学生に質問し、解答させた。
２．各校時の終りにその授業で学習した内容のテストを行った。
３．レポートを課した。

第 1 回～第 10 回は座学中心だったが､毎回授業の後半 20 分程度を授業のまとめのためにグループディスカッションに充てた。また、第 11 回以降はグループ学習が中心となったが、グループでの議論を円滑に進めるために、予習課題として自分の意見を Word でまとめた上で臨むように指導した。

グループディスカッションを取り入れた

グループワークディスカッションの時間を多くとった。

クリッカーの利用。予習問題の提示。グループワーク。小テスト。班内議論。

クリッカーの導入グループ分けして、グループ内のディスカッション、発表の導入

講義を 15～20 分ごとに区切り，プレゼンテーション，ディスカッション，調査などに取り組むことで，飽きさせないようにした。グループメンバーを固定し，互いに意見を出しやすい雰囲気になるようにした。

1.毎回の予習課題（重要な概念やキーワード等の調べ学習）
2.一斉講義におけるクリッカーの利用
3.グループワークの実施（講義内容に関連した課題について 4 名 1 組で取り組む）

班ごとに動物の頭骨標本を割り当てて、その歯の形態から動物種を鑑別するための議論をして、班内での意見をまとめさせるようにしている。講義の最期に理解度小テストを行い、講義への集中度を保つようにしている。

演習問題の解答を，資料提示装置により，学生自身で行った．なお，学生のレポートは，文字が薄くて，読みにくいため，濃いめにコピーした答案を使用した．また，正解のレポートを，ピックアップしておいた．

数学の思考能力を養うための問題を多数用意し，グループ討論，発表を複数回（各グループ 5，6 回程度）行った．毎回の授業の準備，討論，発表等で学んだことを各回，A4 用紙 1 枚（授業の振り返りシート）にまとめて提出させ，添削して返却した．発表に対する受講者による相互評価（4 項目，5 段階）を取り入れ，成績評価にも 30%反映させた．

学生を小グループに分けて各班にオリジナルのストレッチ体操を考案させて発表会を実施。これを動画で記録し、Webclass 上で公開し相互評価させた。

演示実験を取り入れたり，測定，対数グラフの利用などを行い，単なる座学にしないように計画した。

1. 【通常の講義手法】WebClass を利用した講義資料のアップロード（カラー版 pdf ファイル、遅くとも講義 4 日前に掲載）に加え、ハードコピーの配布（片面 8 スライドを両面印刷した A3 モノクロ印刷)、PC プロジェクターの使用および板書による補足。（座学２コマ分+アクティブラーニング３コマ分）×３回
2. 【記憶の定着】講義修了時に小テストを行い、講義のポイントをリマインドさせる。
3. 【教員側の準備】SGD に向けたファシリテーターとのブレインストーミング
4. 【共同学習:課題提示】グループ学習のための課題を提示 。8 グループに対して 4 課題を提示。課題は受講生に選択させる。
5. 【共同学習】提示された課題よる SGD（5 名/グループ)とプレゼンテーション。昨年度は 1 課題についてグループ学習時間を 2 コマ分使用したが、十分でなかったため今年度は 3 コマ使用した。プレゼン資料作成用に iPad を授業中に貸与した。ＴＡは各グループごとに 1 名配置した。
6. 【参加へのモチベーション】SGD とプレゼンテーションにおける各自の役割分担と貢献度の明示化
7. 【評価方法】定期試験 50% + グループ・プレゼンテーションに対する教員の評価（25%）+学生によるピア評価（25%）
8. 【総括】プレゼンテーション内容による討論

毎回の授業において演習等の課題に取り組ませた。授業時間外にも多数の課題に取り組ませた。二人あるいは三人で演習結果を確認し合い，そして教え合いをさせた。

学生に課題を出し、発表させた。

毎回ではないが，討議を円滑に進行することを目的として，映像メディアを活用した.

栄養の教材を準備

・90 人を 4 人ずつの小グループに分け、グループワークを行う。
・予習課題を数回出し、授業時に調べてきたことを出し合い小グループとしてまとめさせる。・小グループは、座席に基づいて分けているが、取り組むものとそうでないものができるだけ固定化しないように 3 度の席替えを行う。
・アクティブラーニングの講習会であったような教えたことをノート等を見ずに小グループ内の他のメンバーに説明させることをできるだけ取り入れる。
・授業の最後の方の回では、小グループをさらにいくつかの大グループに分け、小グループごとに自分たちが考えたことを互いに発表させ、議論を行わせる。
・教員が説明背することは、全て PowerPoint で作成し、各回後に WebClass で資料として学生が手に入れられるようにする。

ご別に授業の中でテーマについての、自分の意見を相談しながら発表させた。またレポートとして提出させた。グループで話し合いを行わせた。

アクティブラーニングは行なっていない。

＜人文・社会系＞

毎回リアクションペーパーを活用し、必要に応じて教員から返信もした。基本的に全受講生に一度は教員から返信があったはずである。また、前半を講義スタイル、後半をグループワークとプレゼンに充て、グループの編成においては、それまでの各学生のコメントや興味分野を勘案し、できるだけ議論が集約するように工夫した。

判例を利用したアクティブラーニングであったため、そ

れが可能となるまでのレベルアップに必要なことに限定した点。アクティブラーニングというには、あまりに受講者数が多かった（88名）こと。

他の受講者の考えを聞き，自分の考えを深めるための時間を設ける同じモジュール内の（よりアクティブラーニングをしている）他の授業との関連性をつくる。

グループ活動の活性化を図ることによる学習の活性化・プレゼン活動の組み込みによる表現力・思考力の教科

アクティブラーニングは行っていない。学生の授業への参加を重視した、教員・学生の双方向性をもつ普通の講義を行った。学生の参加は、質問してそれに答えさせる方式を主とした。学生相互のディスカッションも時々とりいれた。あてる方法を特に工夫した。

受講生の予習に役立てるため、講義資料はWEBCLASS で事前に提供した。・授業を前半と後半に分け、それぞれコメントシートによる質問等を受け付け、主なものに回答を行った。・クリッカーを使用して、受講生の理解度を把握するとともに、考え方を授業に反映させた。

教員による講義だけでなく、学生同士で議論する時間を設けた。毎回、質問やコメントを記入できるカードを配布した。

グループ発表の際、各班がコメントを発表し、また発表班、聞いていた班についての相互評価をとりいれた。

毎講義最後の5分を用いて、「本日の講義で重要と思った点」についての記述を求め、次の時間の最初の5分の時間帯を用いて何名かをピックアップし、講評を行った。テーマの終了時点での「確認テスト」を実施しフィードバックを行った。

毎回の講義の終わりにショートレポートを課し、講義理解の達成度を確認した。

講師の作成した作品を学生にとってもらい、感想を書かせた

毎回のテストを実施。

授業のなかに少人数にわかれてのグループディスカッションを取り入れた。グループでの意見交換の結果はそれぞれの班でメモをまとめるとともに、各グループからの発表を含め全体での共有化を図った。毎回の授業の最後にリアクションペーパーという形で、意見、質問、感想をまとめたものを記述・提出させた。その中で重要と思われる点をとりあげ、次の回の授業で紹介するなど活用した。

特定の最高裁判例を解釈できるレベルで、経済学等の基礎知識を定着させることができるよう、判例集をも利用することとした。

学科の異なる6人～7人のメンバーでのグループを構成し、意見交換や共同での作業がスムーズに行えるようにした。

レスポンスペーパーに書かれたことへすべてコメントし，それらを毎回の授業で全員に配布する（全員が全レスポンスペーパーの内容とそれに対するコメントを知ることができる状況をつくる）。多人数授業での双方向授業を意図した。

学生全員が、講義に関して、課題に対する解答を書いたり、質問に対して応答したりする時間を設けました。また、授業の最後には、毎回、小レポートを課しました。

約10名のグループに分けてディスカッションをさせた

が、基礎的な知識の習得に最低限必要な時間を確保しつつ、自ら調査する時間も確保するよう努めた。

具体的な経験をもとにしながらも想像力が必要になってくる取組課題を設定することに心をくだいた。具体的には、共在感覚の比較文化というテーマについて 5～6 人のグループで討論し、その内容を発表させる形式でアクティブラーニングをおこなった。各グループの採点は聴衆の学生全員でおこなった。また、2～3 人のグループになり、会話の格率から逸脱している会話の転記を用いて会話劇を演じ、ターンテイキングと関連性の概念について学習した

教材選び

アクティブラーニングがうまくいかないその他の原因
（モジュールⅠ科目責任者）

＜自然・生命系＞

今回は問題を多数用意し，受講者には好きな問題を選択して解答，討論してもらう方式にし，講義は一切行わなかった．学生に自主的に取り組んでもらうのが目的であったが，学部間で取り組みに差があった．最終レポートを読むと，数学の問題を解くのにいろんな考え方があることに気づいた，という感想がかなりあり，授業の目的はある程度達成されたと思う．ただ，今年はこのやり方を初めて行ったので，試行錯誤も多く，工夫の余地がかなりある．

ほぼ毎回テキストの購読とペーパーの提出を要求し、ペーパーはほとんどの学生がきちんと準備してきていたが、それを講義中に積極的に発表しようとする学生は少なく、また、特定の学生に限られていた。(指名すれば、ほとんどの学生は答えた)

グループディスカッションを行うようなアクティブラーニングを行うには、授業時間が短すぎる。休憩をはさんで、2 コマ連続の方が良い。

基本的な知識がない学生へのアクティブラーニングは無理と思われ，モジュールⅠということを考慮して，講義形式で授業しました。

一校時であること，また学部学科の構成も関係するかもしれない。

取り組みや授業外課題を熱心に行っている学生もいるのだが、上っ面の調べ学習を行っているものも多い。

アクティブラーニングは行なっていない。

＜人文・社会系＞

毎回、レスポンスペーパーを導入し、講義理解度に向上を図った。

文系と理系が混在し高校で習得した知識大きく異なるため、講義の組み立てに非常に戸惑った。当初から欠席が多くその対応にも大変苦慮した。

小班・大班・全体等のグループの練り上げを基盤にしたアクティブを展開する上で、A41 教室は可動性において使い勝手が悪い。

アクティブラーニングは行っていない。学生の授業への参加を重視した、教員・学生の双方向性をもつ普通の講義を行った。授業としてはうまくいったといえるかもしれない。

・この授業を希望しなかったのに割り当てられてしまったという学生が相当数いたため、全体の雰囲気を損ねていた。・教室のワイヤレスマイクの作動不要により、教壇から離れることができずアクティブラーニング遂行上大きな支障となった。

教員の教育機器類への習熟が必要である。

２クール目ということもあり、初回のクールで出た課題等を検討し、前回よりはスムーズにできたと思います。ただ、意見交換が活発に行われるグループとそうでないグループの差もみられたりしたので、グループの作り方（固定化 or 流動化）や問題提起の仕方など、より充実した活動となるよう検討したいと思います。

現時点での課題（モジュールⅠ科目責任者）

＜自然・生命系＞

同一学部の中でも，学習意欲や予備知識にばらつきが大きい．受講者の編成方法に改善が必要.

１．科目内および科目間での意見交換をもっと行い、科目相互の有機的な繋がりを目指したい。２．基礎力の強化とともに自己学習（生涯学習）の意義や方法についても対応した授業にしたい。

自主性を重んじるため，今年は問題を強制することをしなかったが，学生間で取り組む態度に差がある．次回は各回の範囲を少し限定して，一部講義を交える方がよいかもしれない．与えた問題からいろんな方向へ発展した問題を考えてもらう（問題発見）のが当初の目的であったが，あまりうまくいかなかった.

学生のモチベーションに差があった。講義の構成にも問題があったことは否めないが、ついて来ない（来ようとしない）学生（第３志望の学生？）への対応に戸惑い、困惑した。特に欠席者への対応にかなり苦慮した。　高校で習得した知識が大きく異なる学生が混在するため、高校レベルの内容を話すことが多くなり、想定通り講義が進まないことがあった。

・アクティブラーニングを行うには受講人数が多すぎる。・教室が縦長のため、教員との距離が遠すぎる。その割には、スライドを映すスクリーンが小さすぎて、後ろのほうの生徒にとって、授業が遠くなる。・グループディスカッションを行うようなアクティブラーニングを行うには、授業時間が短すぎる。休憩をはさんで、2 コマ連続の方が良い。

アクティブラーニングをさらに多く取り入れていくことが必要である。

以前の教養講義と比べると学生のモチベーションが明らかに異なると感じます。モジュール導入前は、学生が個々の講義を選択していましたので、講義自体に興味がある学生が集まる傾向がありました。それに対して、現在のモジュール講義では、その講義を主体的に選択した学生が対象ではありませんので、ただ単位を取ればいいという雰囲気を感じます。そのような学生にも興味を持って講義に参加してもらえるよう努力しなければいけないことは理解しますが、容易ではありません。

最終試験の出来が良くない。昨年度に比べて顕著に悪い。原因は不明だが、「モジュール科目は評価が甘い」といった認識が学生の中にあるのだろうか。非常に気になる。

学生に予習→授業→復習の学習サイクルを定着させ、より深い学習に誘導するための戦術を考える必要がある。

LACS を活用したが、まだ初期段階で見ていない学生が一定数いたこと。

自分の専攻でない分野のモジュール講義でアクティブラーニングは，学生に負担が大きいのではないかと思う。

支持されないとやらない，支持されてもやらない，覇気がない学生が多いと感ずる。この２年，学生の考え方が変わってきていると思わざるをえない。

授業テーマに興味のない学生に対して，どのように主体的な学習を促すか.

学生のやる気をどう引き出すか？

専門知識への関心が高くなる大学 1 年生に対して、いかにして教養教育の重要性を納得させるかが最大の課題。また LACS を利用して、受講者に対し学期中の現在評価を明示することで、学修意識（モチベーションあるいは危機感）を活性化したい。

学生の積極性を引き出すことはできたと思う。しかし，学生間の予備知識の差が大きく，表面的な内容になりやすい。またプレゼンテーションの技量も学生間で大きく異なっている。パワーポイントの資料作成だけではなく，話し方などにも大きな差がある。プレゼンテーションの技術について細かく指導する時間や余裕はないので，教養ゼミナールなど，他の講義で十分に行ってほしい。

受講者が多すぎる。授業外課題の与え方をどう工夫するか。

アクティブラーニングの必要性は感じない。

現在専門を非常勤で一部まかなっているが、年齢の問題からそれができなくなると、分野の専門家がいなくなるため、安全安心の全体をすることができなくなり、学生の理解が偏ることが懸念される。

第二希望または第三希望で回ってきた学生がおり、やる気がない学生はそうした学生であった可能性が高い。

教室（3 人掛け机）、ホワイトボード等を用いた意見の集約等環境面での課題を感じる程度

教室がグループ学習に使いにくい

経済夜間主特有だと思われるが、遅刻や欠席が多く、満足なグループディスカッションが出来なかった。

次年度に向けての授業の改良

このアンケート自体の課題について記述する。１年前にこのアンケートが発案された際，回答選択肢について疑問があることを委員会で述べた。たとえば，「受講態度」を取り上げると，受講生全員が同じ態度ではない。熱心に取り組む学生もいれば，明らかにさぼっていることがわかる学生もいる。おおよその割合で表現するとか，複数選択できるようにするとか，工夫が必要と思われる。今後，検討されることを期待する。モジュールＩ科目は２回目の開講であるため「改善点」についての質問を設けるべきではなかったか。この回答には，授業で先生方が実際に感じ取ったことが反映されるはずであり，他科目にとって有益な情報を拾い上げることができるのではないかと思われる。

＜人文・社会系＞

昨年度は初めてということで、すべての担当教員が、モジュールＩの他の科目の講義をほとんど毎回参観したが、今年は、二回目と言うことで、お互いに昨年から変更、改善した点を意見交換する程度で、参観まではしなかった。

教室定員いっぱいとなっている受講者数の抑制。

教員免許状や授業内容との兼ね合いで，どこまでアクティブラーニングにしてよいのか，できるのか，迷っている。

中途まではまったく失敗だと感じていたが、最後の段階で受講者の多くがそれぞれの潜在意識まで深く気づきの幅を広げて来た事に、感動すら覚えた。もう少し現在の形で進めてみたいと思う。

60 分以上遅刻する学生が多い。そんな出席状態だと、その日すでに煮詰まっている論点をわからないまま発言することになり、答えが的外れになる者が少なからずあった。現時点の課題である。

教室の問題やクリッカーの数なども改善が必要だが、なによりも、ある程度希望するモジュールに学生を配属することが非常に重要だと思われる。これを改善することは、24 単位という現在のモジュールの大きさでは困難なので、モジュールの大きさを 12 単位にして、数を増やしてはどうかと考える。この点、是非検討していただきたい。

学生同士の議論の活性化

人数の多さを利用した仕組みにはしましたが、やはり 100 名近くで活動をするとなると難しさを感じています。

百枚ものレスポンスペーパーへの対応には結構、時間を割かれる。勿論、かれらの質問や意見は、次回の講義の冒頭、応えている。しかしながら、学生の反応が昨年度に比べ、いま一歩の感がある。講義者間でいま、話し合っているところです。

教育機器類への習熟。

講師の確保

モジュールの在り方は意味不明。過去の全学の在り方の方が学生にとってもプラス要素が多い。授業内容が異なるものを方法論だけ統一するという感覚が理解できない。

受講人数に対して教室が狭く、グループ作業が非常にやりずらい。また、パワーポイントを使用しての講義を基本としているが、スクリーンが小さく、教室の縦方向に長いため、後ろの方の受講生にとっては見づらいものとなってしまっている（文字を大きくするなどの工夫はある程度しているが、それでもスクリーンの位置が低いので下部の文字が見づらい）。来年度、もし同じ程度の受講生がいるのであれば、ぜひ教室を変更してほしい。

アクティブラーニングというのであれば。受講者数を少なくすべきである。本講義では受講者数は 88 名であり多すぎた。

モジュール内での連携をさらに図ることができれば、なぜこのモジュールなのか、このモジュールを受講することによりどのような地域や技術が身に着くのかがより学生に伝わりやすいのではないかと考えました。

受講者数の多さ。思想の違い。

TA は正規のものでなく、個人的に大学院生に頼んだ。人数が多いので、TA は必要だと思うが、申し込みにくい雰囲気がある。今後、教育学部では、修士課程が無くなり、TA もますます頼めなくなる。人数が多く、準備や、授業後の整理が大変な科目に対しては、全学的な措置として、TA を用意すべきでないか。

時事問題を取り上げると受講生の関心は高まるが、基礎的知識の習得やグループディスカッションとの時間配分が困難になる。また、受講生数が多いので、丁寧な指導がしにくい。

科目の性格があるため、すべての科目にアクティブラーニングを要求するのは適切であるとは思えない

クリッカーの導入。クリッカーの導入時期が、FDの実施時期からかなり遅れてしまい、使い方を忘れてしまった。ぜひ使いたいと切望している。FDを再開講してほしい。英語を取り入れた授業構成。英語スキルの獲得という観点というのは二次的なものであり、それよりも、新奇性の付加という効果を狙うもの。部分的にクリッカーの導入の効果と重なっている。

アクティブラーニングに向けて工夫した点（モジュールⅡ科目責任者）

＜自然・生命系＞

①話しやすいようにグループ討論の組み分けを同じ学部のものとした。討論内容が医療的な場合には、医療系学部以外の学生には医療を受ける立場で討論するように促した。②7 回位の講義の後でも、討論が盛り上がらないグループがあったので、授業後の課題を 2 名程度の学生が協力して書くことを促した。

テスタによるオームの法則、キルヒホッフの法則の実験、コンデンサの過渡現象の実験、オシロスコープによるトランスや交流電圧波形観測、ダイオード整流回路の波形観測、クリップモータの製作をおこなって学生と対話しながら講義を進めた。

グループに分け、それぞれ違ったテーマを調べさせ、発表をさせた。

予備的準備をしてグループ討議に臨む進行形式に配慮した

グループ内の役割（司会、記録、発表、質問）を明確にし、各学生がそれぞれ 2 回以上経験するようにした。また、発表後の質疑応答をにするため、コメントではなく質問をさせ、その場で明確に回答できないときには次回までに調査し回答するように求めた。

受講生の数学的知識と数学の学力差が大きいことに戸惑いがあった。身近な教材や日常の判断に用いられる数学など教材とその扱いなどに工夫を行った。

理解度チェックのための小テストを実施し、答案を返却した。調査した内容を発表する機会を設けた。マイクを廻して適宜発言を求めた。毎回質問やコメントを記入できるカードを配布した。調査内容を発表する機会を設けた。学生同士の議論の時間を設けた。実際の廃液処理施設を見学する機会を設けた。

学生に個別の調べ学習を課しながら，少人数構成のグループ内の学生間コミュニケーションを通じて知識を共有・深化させる形態の授業を導入した。附属図書館の協力を得て学生自身にパスファインダーを作成させ，その過程において学生自身が調べ学習に有効と考えたものを参考図書として選ばせた。学生自身に問題設定させたことも含め，学生主体の調べ学習に取り組ませた。最終レポートとして，授業で学習してきたことをラーニング・ポートフォリオとしてまとめさせた。提示したアウトラインに沿って，提出済みのワークシート，発表スライド等の内容をまとめさせた。省察としては「何を学んだのか」，「自身の学習への取り組み姿勢はどうであったか」，「学習内容が何に役立つのか」を考えさせた。

受講生全員にテーマを与え、調べた内容を A4 用紙 1 枚にポスターに整理させた。講義 2 回分を割いてポスター発表会を実施した。発表者は他の学生あるいは教員、TA 院生と議論を行わせた。

パソコンを用いたプログラムによる実習

数理的な概念はじっくりと時間をかけて考え，実際に自分で実例を計算してみることで理解が深まることも多いため，毎回の授業の後半は個別演習に割り当てた。また，毎回の授業中に授業内容について学生個人を指名して順番に質問を行い，学生の参加を促すよう努めた。

班別学習とその成果取り纏めを実施した。円滑に進むよう、事前に関連レポートの提出とそのリファインを課した。さらにこれらをインターネット経由で行ない（これを Web Report と称する)、班別学習とその成果取り纏めまでの教員からのコメント伝達が確実に行なえるよう配慮した。

学習意欲を高めるように、グループディスカッションや模型製作などを行った。

PowerPoint を用いて課題を提供し、レポートにて学生自身が考えた回答を提出するようにした。

問題を出し、学生に問い続ける。自由にテーマを選び、発表と質疑応答を行う。

スクラッチカードによるテストなどを行った。

＜人文・社会系＞

毎回リアクションペーパーを使用した他、ディベートも数回行った。

リアクションペーパーの活用、課題図書、小レポート、ピアレビューの導入等

1 年生の思想学・思想史学の授業なので、学生への問いかけを適宜行う程度で終始し、どのようにＡＬを進めてよいか最後までわからなかった。非常に苦慮した。

毎回の講義ごとに、講義概要と質問を書かせるレポートを提出させ、次の講義の冒頭で、前回講義に対する主要な質問の一覧を印刷して配布し、回答を行う、双方向型の講義を行った。

公務員試験の問題を解答させた

①３、４人のグループを作って、国際結婚についての調査を行わせ、パワーポイント等で発表させた。②各グループ同士で、６つの議題についてディベートをさせた。

学生の予備知識や理解度を確認するため講義中クリッカーを活用するとともに、各講義の最後に演習を行い理解を深めるよう務めた。加えて、講義への関心を高めるため国の地方出先機関幹部による 講演を設けた。

グループディスカッション授業時間内の発表、専門家による事例紹介講演会の取材とレポート作成

2 回にわたり、少人数のグループによる調査・グループ発表の課題を出した。テーマを決め、全体での自由なディスカッションの機会を設けた。毎回の講義の最後にリアクションペーパーの形で、意見、感想、質問などを記述・提出させた。

１）４～５人のグループに分けて、各グループでテーマを決定、パワーポイントで資料を作成させ、プレゼンテーションをさせた。２）同グループ間で６つのテーマについてディベートをさせた。

・席はできるだけ前から埋めるように学生を指導した（前席 3 列に座った者には授業参加点を加点すると説明、別途出席管理簿を作成した)・授業時間内に必ずグループディスカッションを入れ、代表者に発表させた・学生の理解を促すために、毎回数人に質問し答えさせた・講義テーマ関連レポートを５回要求し、また小テストを３回行った・授業中に寝ている学生は、他の学生のモチベーションを下げるので肩を叩いて起こした・レポート未提出の学生をピックアップして最低３回はメールで警告、また授業終了前に出席確認して、その場で再度注意した

アクティブラーニングがうまくいかない その他の原因（モジュールⅡ科目）

＜自然・生命系＞

教員としてはあまりうまくいかなかったと思っていたが、学生による授業評価では高い評価を得ていたことに驚きと安堵感を持っている。

第 2 クールでは，クリッカを積極的に活用して，授業の更なる活性化を図りたい。

＜人文・社会系＞

期待したほど学生からの積極的な発言はなかった。また、最後の講義の際に、学生と意見交換をしたが、この科目において、学生は総じてアクティブラーニングの導入に否定的であった。ある学生から「この科目は、その性格上、主に新しい知識を学ぶべき科目であり、同じモジュールの他の科目で積極的にアクティブラーニングを行い、知識を応用するような取り組みが望ましい」という発言があり、多くの学生が賛同していたように見受けられた。

・講義の時間は限られているので、主に WebClass 上でレポートの作成、提出やピアレビューを試みたが、非常勤講師の学外からの WebClass へのログインに支障が生じ、思うようにコメント等ができなかっただけでなく、学生から提出されたレポートやピアレビューのコメントをファシリテーターがダウンロードして非常勤講師へ送信する等、負担が大きかった。

・Ｑ１に記したとおりで、思想学・思想史学の 1 年生の授業において、どのようにＡＬを進めてよいか、考慮したものの、最後まで判然としなかった。

ディベートの時に学生たちは期待以上に積極的に自分の意見を述べていた。

準備経費の主な用途

情報収集のための旅費

教材、特に課題図書、視聴覚教材の購入

テスタ、オシロスコープ、変圧器、ボード

歯科用シェードガイド、iPad 等

TA 経費

コンピュータを購入

Ibad、書籍

書籍の購入

調べ学習に用いる参考図書の購入

講義の内容の副教材となる書籍等、資料を提示するための iPad

関連文献の購入、出張経費等

プレゼン用資料作成

関連資料・書籍の購入

授業で使用する Ipad の購入。

個人用クリッカ、トナーカートリッジ、講義用教材

視聴覚ソフト購入、連絡用機器購入

IT 関連機器の購入

教材

情報収集のために Tablet を購入した

今後の準備経費の必要理由

リアルタイムで動く国際的な問題がテーマのため、情報のアップデートがある程度必要である

今後も教材の購入を継続する必要がある

消耗品が必要なため

教材の購入

まだＩｐａｄが不足している

最新トピックを学習テーマに採用しているため，参考図書となる資料がまだ不足しており，増強が必要である。

講義の材料集めのためには最近の動向を把握する必要があり、文献購入費用等が発生するため。

資料作成やその他の費用、場合によっては安価なノートパソコンの購入

授業教材としてのメディア（新聞等）の購読が一定期間必要と考える

関連資料・書籍の購入

まだＩｐａｄが不十分である。

ソフト教材の充実、レポート課題の電子化と保存

消耗品など自己負担はできない。

現時点での課題（モジュールⅡ）

＜自然・生命系＞

人前で話をすることができない学生が多いように思う。授業後の個人的な質問にも全員に聞かせたい良い質問があり、その旨を話して学生を鼓舞するが、みんなの前で質問するには至っていない。

科目名通り、核兵器や被ばくに関する文学、芸術を扱う講義であるが、今まで該当分野の講義がなかったのか、大学図書館等に、必要な図書や教材があまり揃っておらず、講義で学生に必読を課す図書類の確保に苦労し、結局不足分を担当者の私物や非常勤の方の寄贈で一部補った。今後はそれらの図書の購入と管理をどのように進めるか、課題である。

受講者が多くなると、実験をさせたり、実験して見せることが難しくなると思われる。

学生にいかに興味をもって取り組んでもらうかが大きな課題と思います。

学生の授業態度の改善（スマホと私語）

積極的に取り組む学生とそうでない学生に二極化する。

数学的内容の扱いとアクティブラーニングの関わりについて、その展開のあり方が課題である。

学生間の議論の活性化

講義内容の洗練

学習テーマに制限されないように，授業方法を一般化すること。　情報化の役割と課題
アクティブラーニングを行うには受講生が多すぎ

る。定員は 30 人程度が限度と思う。

講師の負担が大きい。授業を受ける学部と行う講師の学部が異なるため、興味の対象が大きく異なり、マッチしない。

理系学部と文系学部が混在しており，非常にやりにくかった。学習意欲あるいは予備知識に大きな差がある。より学習効果を高めるためには，既習・未習で分けるなど，受講者の編成方法を再考すべきである。

班内での学生同士のディスカッション活性化方法。

やる気のない学生をどうにかしないと。授業中でもスマホを扱いゲームするなど、大学生であるかどうか以前の問題。

学生に調査して、本当に必要な科目を絞って充実して行く。

学生はモジュールの枠内で学ばされている感が強く、もっと自由にモジュールの枠を越えて、自らの意志で学びたい科目を選択させるべきと考える。

＜人文・社会系＞

学生自身が、アクティブラーニングの導入に反対し、従来型の講義を強く希望するという反応はあまり想定していなかった。今後どう対処するか、検討したい。

Ｑ１、Ｑ１１に記したとおり。学としての思想・哲学の意味・意義がよくわかっていない１年生に、思想学・思想史学の授業において、どのようにＡＬを実践したらよいか、今後も模索が続くでしょう。

専門に関する様々な仕事をこなしながらなので、やや負担に感じた。もう少し学生数が少ない方が、教育効果があがるかもしれないと思った。

受講する学生にどの程度の学習意欲や関心があるか不明であり、講義の組み立てに苦労しました。

受講生によって授業に臨む態度にかなり開きがあるので、より活性化できるよう工夫を凝らしたい。

まず定着させること

グループ作業においては、熱心な学生と消極的な学生の差が大きいと感じた。内容及び発表の出来においてはグループでの評価となるので、熱心な学生としては不公平感が出てしまいかねない。グループ作業の評価の仕方について工夫がいると感じた。

グループワークの時に個人の評価が曖昧になるので、様々な評価法をを使用したが、最終的に複雑になりすぎたので、次回はもう少し整理したい。また、ディベートのための予習をもっと徹底させるべきだったと思った。

今回の受講者数は６７名であったが、人数が多すぎてディスカッション後の発表の機会が全員に与えられなかった。またグループ作りにも時間がかかった。双方向型の授業は少人数が原則であり、受講者数は多くとも２５～３０名で行うべきである。６７名の課題のレポート（５回）をメールで毎回チェックし、取り出し、読んでコメントして返却する、未提出者に督促するのに相当な時間がかかった。今後は LAKS をぜひ今後活用したい。

講義以外の負担が多すぎる（講習会やアンケートなど）モジュールにしたこと自体が，教養教育として学生が勉強したいこと，学生の関心を高めることの範囲を狭めているように思う依頼に回答し

ても事務方のリアクションがない（催促だけはまめにする）

一部熱心に受講する学生もいたが、理系の学生のためか、反応が今一歩だった。

まとめ

１）アクティブラーニングの方法論

教員間でアクティブラーニングに対する意識や知識の差がみられる。積極的にグループワークや体験型学習を採り入れている教員もいるが、一方で知識を習得させる性質が強い科目の場合、いかにアクティブラーニングを導入するか困惑している教員もいる。科目の性質に応じたアクティブラーニングの様々な方法を学内全体で共有していく試みが必要である。

２）学生の学習意欲および既習内容の差にいかに対応するか

第 2、第 3 希望のモジュールに配置された学生には履修意欲の減退が見られる。そのような学生達の学習意欲をいかに喚起するかが課題。

また、文系と理系の学生が混成しているクラスでは、授業のレベル設定をいかにするか困惑する教員も多い。学士課程カリキュラムにおけるモジュール科目の意義、位置づけについて広く告知していくことが望まれる。

３）テーマ責任者の大きな負担感

モジュール科目を担当する教員、なかでもテーマ責任者は大きな負担感を感じている。特に複数学部から構成されるテーマで顕著。テーマ責任者を担当する場合にポジティブな教育面での評価を行うなどの対策が必要ではないだろうか。

４）モジュール科目内において教育目標等の連携や系統化をいかに行うか

同じテーマのもと複数科目から構成されるモジュール科目の特色を活かすならば、科目間での教育内容を関連づけたり、モジュールⅠからモジュールⅡへと履修順序が構成されている意義について教員間で話し合う機会を持つことが望ましい。しかし現実には、これまでの全学科目同様、モジュール内の各科目間の関係は独立性が高い（科目間の内容に関連性が見出しにくい）形で構成されている。担当教員がモジュール科目で扱う知識内容や教育目標について話す機会を増やすための支援、また、モジュールを担当する教員が持つ負担感の軽減のための施策が求められる。